

紅黃録

伊藤左千夫

青空文庫

なるとう
成東の停車場をおりて、町形をした家並みを出ると、なつかしい故郷の村が目の前に見える。十町ばかり一目に見渡す青田のたんぼの中を、まっすぐに通った県道、その取付きの一構え、わが生家の森の木間から変わりなき家倉の屋根が見えて心も落ちついた。

秋近き空の色、照りつける三時過ぎの強き日光、すこぶるあついけれども、空気はおのずから澄み渡って、さわやかな風のそよぎがはなはだ心持ちがよい。一台の車にわが子ふたりを乗せ予よは後からついてゆく。妹が大きいから後から見ると、どちらが姉か妹かわからぬ。ふたりはしきりに頭を動かして話をする。姉のは

黄色く妹のは紅色のりぼんがまた同じようにひらひらと風になびく。予は後から二児の姿を見つつ、父という感念がいまさらのように、しみじみと身にこたえる。

「お父さんあれ家うちだろう。あたのおぼえてるよ」

「あたいだって知ってら、うれしいなア」

父の笑顔を見て満足した姉妹はやがてふたたび振り返りつつ、

「お父さん、あら稲の穂が出てるよ。お父さん早い稲だねイ」

「うん早稲わせだからだよ」

「わせってなにお父さん」

「早稲というのは早く穂の出る稲のことです」

「あアちゃんおりてみようか」

「いけないよ、家へ行つてからでも見にこられるからあとにしないさい」

「ふたりで見にきようねイ、あアちゃん」

姉妹はもとのとおりに二つの頭をそろえて向き直つた。もう家へは二、三丁だ。背の高い珊瑚樹さんごじゆの生垣いけがきの外は、桑畑が繁りきつて、背戸の木戸口も見えないほどである。西手な畑には、とうもろこしの穂が立ち並びつつ、実みがかさなり合つてついている、南かぼちゃ瓜つるの蔓が畑の外まではい出し、とうもろこしにもはいついて花がさかんに咲いてる。三角形に畝うねをなした、十六角豆ささげの手も高く、長い長いさやが千筋に垂れさがっている。家におつた昔、何かにつけて遊んだ千菜畑せんさいばたけは、雑然として昔ながらの夏のさま

で、何ともいいようなくなつかしい。

堀形をした細長い田に、打ち渡した丸木橋を、車夫が子どもひとりずつ抱きかかえて渡してくれる。姉妹を先にして予は桑畑の中を通つて珊瑚樹垣の下をくぐつた。

家のまわりは秋ならなくに、落葉が散乱して、見るからにさびしい。生垣いけがきの根にはひとむらの茗荷みよがの力なくのびてる中に、茗荷茸だけの花が血の気少ない女の笑いに似て咲いてるのもいっそうさびしさをそえる。子どもらふたりの心に何のさびしさがあろう。かれらは父をさしおき先を争うて庭へまわつた。なくなつたその日までも庭の掃除そうじはしたという老父がいなくなつてまだ十月とつきにもならないのに、もうこのとおり家のまわりが汚なくなつ

たかしらなどと、考えながら、予も庭へまわる。

「まあ出しぬけに、どこかへでも来たのかい。まあどうしようか、すまないけど少し待って下さいよ。この桑をやってしまうから」

「いや別にどこへ来たというのでもないです。お祖父じいさんの墓参まゐりをかねて、九十九里くじゅうくりへいつてみようと思つて……」

「ああそうかい、なるほどそういえばだれかからそんな噂うわさを聞いたつけ」

手拭を頭に巻きつけ筒袖つつそですがた姿すがたの、顔はしわだらけに手もやせ細つてる姉は、無い力を出して、ざくりざくり桑おおぎを大切に切つてる。薄暗い蚕かいこ棚だなの側で、なつかしい人なだけあわれはわけ

ても深い。表半分雨戸をしめ家の中は乱雑、座を占める席もないほどである。

「秋蚕あきごですか、たくさん飼ったんですか」

「あアに少しばかりさ。こんな年をとっててよせばよかったに、隣でも向こうでもやるといふもんだから、つい欲が出てね。あたつてみたところがいくらにもなりやしないが、それでもいくらか楽しみになるから……」

「なアにできるならやるがえいさ。じつとしていたんじや、だいいちからだ体のためにもよくないから」

「そんなつもりでやるにやっても、あんまり骨が折れるとばかばかりかしくてねイ。せつかく来てくれてもこのさまではねイ、わたし妾やま

た盆にくるだろうと思つてました」

「百姓ひやくしやうや家だものこのさまでけっこうですよ。何も心配するこ
とはありやしないさ」

「そりやそうだけれどねイ」

姉妹はいつの間に庭へ降りたか、千日草浦島草のまわりで蝶ちようや蜻蛉とんぼを追いまわしているようすだ。予は自分で奥の雨戸を繰りや
つて、あたりをかたづけした。姉もようやくいきまりをつけて奥へ
くる。例のとおり改まってばかりいねいに挨拶あいさつをする。そして
茶をわかすからといって立った。

蚊帳かやの釣り手は三隅すみだけはずして、一隅はそのままむちやくち
やに片寄せてある。夜具も着物も襖ふすまの隅へ積み重ねたままである。

朝起きたなりに、座敷の掃除もせぬらしい。昔からかかつて晴せ耕いこうどく雨読どくの額も怪しく蜘蛛くもの巣が見える。床の間にはたたんだ六枚折りの屏風びょうぶが立てかけてあつて、ほかに何やかやごてごてと置いてある。みえも飾りもないありさまである。

若夫婦は四、五年東京に出ているところへ、三年前に老母がなくなり、この一月また八十五歳の父が永眠した。姉夫婦はたしか六十に近いだろう、家のさびしくなつたも無理はない。予はけつしていやな心持ちはせぬけれど、両親もずいぶん達者なほうだつたし、姉夫婦は働き盛りで予らの家うちにおつたころには、この大きな家もどよむばかりであつたのだ。それにくらべると今のわが家は雪にとじこもつた冬の心持ちがする。兄は依然として大酒を飲

み、のっそりぽんとした顔をして、いつも変わらずそれほど年寄りじみないが、姉のおとろえようは驚くばかり、まるでしわくちゃな老婆になつてしまつてる。

予はしばらく背を柱に寄せて考えるともなく、種々に思いが動く。姉の老衰ろうすいを見るにつけ、自然みずからをかえりみると、心細さがひしひしと身に迫りくる。

「わたしが十六の年にこの家へ来たその秋にお前が生まれた。それで赤ん坊のときから手にかけてせいとか、兄弟の中でも、お前がいちばんなつかしい」

姉はいつでもそういつて予に物語つた。その姉がもはやあのとおり年寄りになつたのに、この一月までも達者でおられた父さえ

今は永劫えいごうにいなくなられた。こう思いくると予はにわかに取り残されものになったかのごとく、いやにわが身のさびしみをおぼえる。ついきのうまでも、まだまだとのみ先を頼むの念は強かつたに、今はわが生の余喘よぜんも先に見えるような気がしてならない。予はもう泣きたくなつた。思いきり声を立てて泣いてみようかと思う。予の眼はとうに曇つていたのである。

子どもたちは何を見つけたかしきりにおもしろがつて笑い興じている。その笑い声は真にはればれしくいきいきとして、何ともいいようなく愉快そうな声である。そうしてその声はたしかに人を闇黒より呼び返す声である。予は実に子どもたちの歡呼の叫びそせいに蘇生して、わずかに心の落ちつきを得たとき、姉は茶をこしら

えて出てきた。茶受けは予の先に持参した菓子と、胡瓜きゅうりの味噌漬かみなりぼしけ。雷かみなりぼし干の砂糖漬けであった。予が好きだということを知つての姉の用意らしい。

「よくよく何もなくてただほんの喉のどしめしだよ。子どもらはどうしたろ。とうもろこしをとつてみたらまだ早くてね」

姉はいそいそとして縁から子どもたちを呼び迎える。ふたりは草花を一束たばずつ持って上がってくる。

「そんなに花をたくさんとちやいかんじやないか」

「えいやね、東京では花だつてかつてにやとれないだろう。いくらとつてもえいよ、とればあとからいくらでも生はえるから。たアちゃんにあアちゃんだったつけね。ううん九つに十……はアそん

なになるかい」

「お前たちその花の名を知ってるかい」

「知らない……お父さん。なんというお花」

「うんまるい赤いのが千日草。そっちのが浦島草」

子どもたちは花がうれしくて物もたべたがらない。ふたりは互いに花を見せ合って楽しんでいる。

「菓子もいらぬ。そんなにこの花がえいのかい。田舎いなかの子どもと違って、東京の子どもは別だわな」

「なにおんなじさ。ずいぶん家ではあばれるのさ」

やがて子どもらはまた出てしまう。年はとつても精神はそれほどには変わらない。姉はただもうなつかしさが目にあふれてみえ

る。平生はずいぶん出来不出来できふできのある人で、氣むつかしい人だが、
こうなると何もかもない。

「くるならくると一言いうてよせば何とかしようもあつたに。
ほんとにしようがないなこれでは。養蚕さえやらねば、まさか
こんなでもないだが。まアこのざまを見てくつだいま」

「何のしようがいるもんですか。多分忙しいんだろうから、実は
今夜も泊まらずに、すぐ片貝へと思つたけれど、それもあんまり
かと思つてね……」

「そうともまた、いくら忙しいたつて、一晩も話さないでどうす
るか。……きようはまたなんというえい日だろうか。子どもた
ちがあアして庭に騒いで遊んでると、ようよう人間の家らしい氣

分がする。お前はほんとに楽しみだろうね。あんなかわいいのをふたりもつれて遊びあるいてさ」

「いや姉さんふたりきりならえいがね、六人も七人もときては、楽しみも楽しみだが、やっかい 厄介も厄介ですぜ」

姉はそんな言には耳もかさず、つくづくと子どもたちの駆けまわるのに見入って、

「子どもつてまアほんとにかわいいものね、子どもものうれしがって遊ぶのを見てるときばかり、しよたい 所帯の苦勞もわが身の老いぼけたのも、まったく忘れてしまうから、なんでも子どものあるのがいちばんからだの薬になると思うよ。けっして厄介だなどと思うもんでない」

「まったく姉さんのいうことがほんとうです、そりやそうと孫はどうしました」

「あア秋蚕が終おえると帰ってくるつもり。こりやまア話ばかりしててもどもなんね。お前まア着物でも脱ぬいだいよ。お……婆やも帰うちった、家でも帰うちったようだ」

いずれ話はしみじみとしてさすがに、親身しんみの情である。蚕棚の側から、どしんどしん足音さしつつ、兄も出てきた。臍へそも見えるばかりに前も合わない着物で、布袋ほてい然たる無ぶかつこう恰好な人が改まっていてねいな挨拶ははなはだ滑稽こっけいでおかしい。あい変わらず洒はやってるようだ。

「ぼんにくるだろうといってたんだ。あアそうか片貝へ……この

ごろはだいぶ東京から海水浴にくるそうだ」

「片貝の河村から、ぜひ一度海水浴に来てくれなどといってきたから、ついその気になってやって来たんです」

「それやよかった。何しろこんな体ていたらくで、うちではしようがねいけど、婆が欲張って秋蚕なんか始めやがってよわっちまア」

「えいさ、それもやっぱり楽しみの一つだから」

「うんそうだ亀公のところなます鯰があつたようだった、どれちよつとおれ見てきべい」

兄はすぐ立つて外へ出る。姉もいま一度桑をやるからとこれも立つ。竈屋かまやのほうでは、かまだきを燃す音や味噌する音が始まった。予も子どもをつれて裏の田んぼへ出た。

朱あけに輝く夕雲のすき間から、今入りかけの太陽が、細く強い光を投げて、稻田の原を照り返しうるおいのある空気一種の色ある明るみが立った。この一種の明るみが田園村落をいつそう詩化している。大きく畝うねをなして西より東へ走った、成東の岡おかの繁りにはうす蒼く水気がかかっている。町の家の峯をかけ、岡の中腹を横に白布をのしたように炊かしぎの煙が、わざとらしくたなびいている。岡の東端ひととき木立こだちの深いあたりに、朱塗しゆぬりの不動堂がほんのりその木立の上に浮きだしている。子どもたちはいつのまか遠く予を置いて、蝗いなごを追つてるらしく、畔あぜ豆まめの間に紅黄のりぼんをひらつかせつつ走つてる。予は実にこの光景に酔った。

むかし家におつたところに毎日出あるいた田んぼ道、朝に晩にな

がめたこの景色、おもむきは昔の記憶に少しも変わらないが、あまたの子持ちとなつた今のわが目には特別な意味を感じぬわけにゆかぬ。昔せきじつ日のことが夢でなくて、今の現在がかえつて夢のように思われてならない。老いさらばいた姉、ぼうんとした兄、暗寂たる家のように。それから稲の葉ずえに露の玉を見る、静かに美しい入り日のさまは、どうしても、今の現在が夢としか思われ
ない。

ものさびしいうちに一種の興味を感じつつもその愉快な感じのうちには、何となしはかなく悲しく、わが生の煙にひとしき何もかも夢という思念が、潮うしおと漲みなぎりくるを感ずるのである。

ぼんやり立ちつくした予は足もとの暗くなつたのもおぼえなか

った。

「お父さん、もう帰ろうよお父さん」

とふたりの子に呼び立てられ、はじめてわれに帰った。裏口より竈屋かまやのほうへまわると兄は鯰を料理していた。予はよほど神経疲労したもののか、兄が鯰を切つてそのうす赤い血を洗つてる光景までがどうしても現実とは思えない。ふたたび子どもにうながされてようやく座敷へ上がる。姉はばさばさ掃き立てている。洋燈ランプが煌々こうこうとして昼のうす暗かった反対に気持ちがいい。

この夜も姉は予と枕をならべて寝る。姉は予がくるたびにいつでもそうであるのだ。田畑のできばえのことから近隣村内のできごとや、親類のいざこざまで、おもしろかったこと、つまらなか

つたこと、いまいまして残念であつたことなどのいつさいを予に話して聞かせる。予がそれ相当な考えをいうて相手になるものから、姉はそれがひじょうに楽しみらしい。姉はおもしろかつたことも予に話せばいつそうおもしろく、残念な口惜しいことなどは、予に話せばそれでおおいに気分がよくなるのだ。極端にのん気な酒飲みな夫をもつた姉は、つねにしんみりした話に飢えてゐる。予はずいぶんそのらちもなき話に閉口するときがあるけれど、生まれるとから手にかけて予をなつかしがつてゐると思つてはいつでもその気で相手になる。姉も年をとつたなと思つと氣の毒な思いが先で、予は自分をむなしくして姉に満足を与える氣になる。とうとう一時過ぎまでふたりは話をした。兄がひと寝入りして目

を覚まし、お前たちまだ話しているのかと驚いたほどである。多くの話のうちに明日行くべきお光^{みつ}さんに関しての話はこうであった。

「お前はこういう気でにわかにお光が所へ行く気になったえ」

「そういう気もないです。お光さんから東京からもきてくれなければ、こちらからも東京へいつて寄れないからなぞというてきたからです」

「そんならえいけれどね。お前にあれをもらってくれまいかって話のあったとき、少しのことで話はまとまらなかったもの、お前もあれをほしかったことは、向こうでもよく知っているから、東京の噂はよく出たそうだよ。それにあれもいまだに子どもがな

いから、今でもときどき気もみしてるそうだ。身しんじょう上じょうはなかなかえいそうだけれど、あれもやっぱりかわいそうさ。お前にそうして子どもをつれてゆかれたら、どんな気がするか」

「そんなこと考えると少しおかしいけれど、それはひとむかし前のことだから、ただ親類のつもりで交際すればえいさ」

予は姉には無造作むぞうさに答えたものの、奥の底にはなつかしい心持ちがないではない。お光さんは予には従姉いとこに当たる人の娘である。

翌日は姉夫婦と予らと五人つれ立って父の墓参をした。母の石せ塔きとうの左側に父の墓はまだ新しい。母の初七日しよなぬかのおり境内へ記

念に植えた松の木杉の木が、はや三尺あまりにのびた、父の三年忌たけには人の丈たけ以上になるのであろう。畑の中に百姓屋めいた萱屋かやや

の寺はあわれにさびしい、せめて母の記念の松杉が堂の棟むねを隠すだけにのびたらばと思う。

姉がまず水をそそいで、皆がつぎつぎとそそぐ。線香と花とを五つに分けて母の石塔にまで捧げた。姉夫婦も無言である、予も無言である。

「お父さんわたいお祖父じいさん知ってるよ、腰のまがった人ねい」

「おとし一昨年お祖父さんが家へきたときに、大きい銀貨一つずつもらったのをおぼえてるわ」

「お父さん、お祖父さんどうして死んだの」

「年をとったからだよ」

「年をとるとお父さんだれでも死ぬのかい」

「お父さん、お祖母ばあさんもここにゐるの」

「そうだ」

予は思わずそう邪じゃけん険にいつて帰途につく。兄夫婦も予もなお無言でおれば、子どもらはわけもわからずながら人々の前をかねるのか、ふたりは話しながらもひそひそと語り合つてる。

去年母の三年忌で、石塔を立て、父の名も朱字に彫ほりつけた、それも父の希望であつて、どうせ立てるならばおれの生きてるうちにとのことであつたが、いよいよでき上がつて供養くやうをしたときに、杖を力に腰をのばして石塔に向かつた父はいかにも元気がなく影がうすかつた。ああよくできたこれでおれはいつ死んでもえいと、父は口によるこばしき言ことをいったものの、しおしおとした

父の姿にはもはや死の影を宿し、人生の終しゆうえん焉老いの悲惨ということをつつみ得なかった。そうと心づいた予は実に父の生前石塔をつくったというについて深刻に後悔した。なぜこんなばかかことをやったのであろうか、われながら考えのないことをしたものかなど、幾度悔いても間に合わなかった。それより四カ月とたたぬうちに父は果たして石塔の主人となられた。一村二十余戸八十歳以上の老齡者五人の中の年長者であるということをしめて、せめてもの気休めとして、予の一族は永久に父に別れた。

姉も老いた、兄も老いた、予も四十五ではないか。老なる問題は他人の問題ではない、老は人生の終焉である。何人もまぬかるることのできない、不可抗的の終焉である。人間はいかにしてそ

の終焉を全うすべしか、人間は必ず泣いて終焉を告げねばならぬものならば、人間は知識のあるだけそれだけ動物におとるわけである。

老病死の解決を叫んで王者の尊を弊履のごとくに捨てられた大聖釈尊は、そのとき年三十と聞いたけれど、今の世は老若なお青年を夢みて、老なる問題はどこのすみにも問題になっていない。根底より虚偽な人生、上面ばかりな人世、終焉常暗な人生……

予はもの狂わしきまでにこんなことを考えつつ家に帰りついた。犬は戯れて躍ってる、鶏は雌雄あい呼んで餌をあさってる。朗快な太陽の光は、まともに庭の草花を照らし、花の紅紫も枝葉の緑

も物の煩わづらいということをしつさい知らぬさまで世界はけつして地獄でないことを現実に証明している。予はしばらく子どもらをそつちのけにしていたことに気づいた。

「お父さんすぐ九十九里へいこうよう」

「さあお父さんてば早くいこうよう」

予も早く浜に行きたいは子どもらと同じである、姉夫婦もさあさあとしたくをしてくれる。車屋が来たという。二十年他郷に住んだ予には、今は村のだれかれ知った顔も少ない。かくて紅黄の美しいりぼんは村中を横ぎった。

お光さんの夫なる人は聞いたよりも好人物で、予ら親子の浜ずまいは真に愉快である。海気をふくんで何となし肌当たりのよい

風がおのずと気分をのびのびさせる。毎夕の対酌に河村君は予に語った。妻に子がなければ妻のやつは心細がつて気もみをする、親類のやつらは妾めかけでも置いてみたらという。子のないということはずいぶん厄介ですぜ、しかし私はあきらめてゐる、で罪のない妻に心配させるようなことはけつしてしませんなどいう。予もまた子のあるなしは運命でしかたがない、子のある人は子のあるのを幸福とし、子のない人は子のないを幸福とするのほかないと説といた。お光さんの気もみしてるといふことは、かげながら心配していたが、それを聞いておおいに安心した由よしを告げた。しかしお光さんはやはり気もみをしているのであつた。

このごろの朝の潮干しおひは八時過ぎからで日暮れの出汐でしおには赤貝の

船が帰ってくる。予らは毎朝毎夕浜へ出かける。朝の潮干には蛤はまぐりをとり夕浜には貝を拾う。月待草に朝露しとど湿った、浜の芝しばは原らを無邪気な子どもを相手に遊んでおれば、人生のことも思う機会がない。

あつてみない前の思いほどでなく、お光さんもただ懇こん切せつな身内の人で予も平気なればお光さんも平気であつたに、ただ一日お光さんは夫の許しを得て、予らと磯いそに遊んだ。朝の天気はまんな天際てんがいの四方に白雲を静めて、洞ほらのごとき蒼空はあたかも予ら四人を中心としてこの磯辺をおおうている。単純な景色といわば、九十九里の浜くらい単純な景色はなからう。山も見えず川も見えずもちろん磯には石ころもない。ただただ大地を両断して、海と

陸とに分かち、白波と漁船とが景色を彩^{あや}なし、円大な空が上をおおうてるばかりである。磯辺に立って四方を見まわせば、いつでも自分は天地の中心になるのである。予ら四人はいま雲の八重垣^{やえがき}の真洞^{まほら}の中に蛤をとっている。時の移るも知らずに興じつつ波に追われたり波を追ったりして、各小袋に蛤は満ちた。よろこび勇んで四人はとある漁船のかけに一休みしたのであるが、思わぬ空の変わりようにてにわか雨となった。四人は蝙蝠傘^{ことうもり}二本をよすがに船底に小さくなってしばらく雨やどりをする。

ふたりの子どもを間にして予とお光さんはどうしても他人とはみえぬまで接近した。さすがにお光さんは平気でいられない風情^{ふせい}である。予はことさらに空を眺めて困った雨ですなアなど平気を

よそおう。

「あなたはほんとおしあわせです」

お光さんはまず口を切った。

「なにしあわせなことがあるもんですか、五人も六人も子どもがあつてみなさい、どうにもこうにも動きのとれるもんじやないです。私はあなたは子がなくてしあわせだと思つてます」

予は打ち消そうとこういつてみたけれど、お光さんの境きょうぐう遇

に同情せぬことはできない。お光さんはじつとふたりの子どもを見つめるようすであつたが、

「私は子どもさえあれば何がなくてもよいと思ひます。それや男かたの方は子がなるとして平気でいられましようけれど、女はそうはゆ

きませんよ」

「あなたはそんなことでいまだに気もみをしているのですか。河村さんはあんな結構けっこうにん人ですもの、心配することはないじゃありませんか」

「あなたのご承知のとおりで、里へ帰つてもだれとて相談相手になる人はなし、母に話したところで、ただ年寄りに心配させるばかりだし、あなたがおいでになったからこのごろ少し家にいます。が、つねは一晩でも早くやすむようなことはないのですよ。親類の人は妾でも置いたらなどいうくらいでしょう。一日とて安心して日を暮らす日はありませんもの。こんなに不安心にやせるような思いでいるならば、いつそひとりになったほうがと思いますの。

東京では女ひとりの所帯はたいへん気安いかいいますから……」
予は突然打ち消して、

「とんでもないことです。そりや東京では針仕事のできる人なら身一つを過ごすくらいはまことに気安いには相違ないですが、あなたは身分ということを考えねばなりません。それにそんな考えを起こすのは、いよいよいけないという最後のときの覚悟です。今おうちではああしてご無事で、そうして河村さんもちやんとしているのに、女としてあなたから先にそんな料りょうけん簡かんを起こすのはもつてのほかのことですぞ」

予はなお懇切に浅はかなことをくり返してさとした。しかし予は衷ちゆうしん心ふびん不憫ふびんにたえないのであった。ふたりの子どもはこくり

こくり居眠りいねむりをしてる。お光さんもさすがに心を取り直して、

「まあかわいらしいこと、やつぱりこんなかわいい子の親はしあわせですわ」

「よいあんばに小雨になった、さア出掛けましょう」

雨は海上はるかに去って、霧のような煙のような水蒸気が弱い日の光に、ぼつと白波をかすませてるのがおもしろい。白波は永久に白波であれど、人世は永久に悲しいことが多い。

予はお光さんと接近していることにすこぶる不安を感じその翌々日の朝このなつかしい浜を去った。子どもらは九十九里七日の楽しさを忘れかねてしばしば再遊をせがんでやまない。お光さんからその後消息は絶えた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓他六篇」新学社文庫、新学社

1968（昭和43）年6月15日発行

1982（昭和57）年6月1日重版

入力：大野晋

校正：小林繁雄

2006年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

紅黄録

伊藤左千夫

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>